

子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について（答申）

令和4年 6月

岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議

目 次

はじめに

第1 「夢」のとらえ方	・・・	1
第2 現状と課題	・・・	1
1 子どもの意欲や主体性について	・・・	1
2 豊かな体験活動について	・・・	2
3 地域と学校の連携・協働について	・・・	4
第3 仮説の設定	・・・	7
第4 モデル校等による検証	・・・	8
1 教育課程内	・・・	8
2 教育課程外	・・・	30
第5 子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について	・・・	35
1 3つの視点から見た方策	・・・	35
2 まとめ	・・・	37
3 具体的な方策の提案	・・・	38

おわりに

はじめに

令和2年9月1日、岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議（以下「本審議会」という。）は、岡山県教育委員会より「子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について（以下「諮問事項」という。）」諮問された。

具体的には、子どもたちが学びを更に進めようとする意欲を持つためには、学びの原動力である夢や目標を育むことが大切であること、夢を持ち育みながら、その実現のための道筋や方法について考え、更には夢や目標に向かって挑戦する教育である「夢育」について、学校教育のみならず、就学前から、社会教育、家庭教育など様々な学びの機会を通じて推進していきたいことが諮問の理由であり、諮問事項について、次の3つの視点を踏まえ、調査審議することが求められた。

- ① 学校と地域(家庭、社会教育施設、社会教育団体、企業等)が連携・協働して行う取組として、就学前から、子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには、どのような取組が有用と考えられるか。
- ② その際、新学習指導要領の基本的な理念である「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、地域住民の参画による学校運営協議会（コミュニティ・スクール）や地域学校協働活動の効果的な推進が求められる中、学校側からの視点も含めて、県内各地域の実情に沿う体制づくり、運営方法は、どのようなものが効果的であるか。
- ③ 子どもたちに豊かな学びを提供する地域ぐるみの活動を、保護者や地域の大人の学びにどのように生かすことができるか。

本審議会は、学識経験者、社会教育関係者、学校教育関係者、家庭教育関係者、企業関係者で構成され、令和2年9月1日の第1回会議以降、専門部会も含め12回にわたり調査審議を行い、このたび、諮問事項について、次のとおり答申する。

令和4年6月
岡山県生涯学習審議会及び岡山県社会教育委員の会議

第1 「夢」のとらえ方

「夢」のとらえ方は、目の前の目標や職業、生き方等、人によって様々である。本審議会においては、「夢」や「夢育」は、かなり先の未来にある理想像や自分のなりたい職業だけでなく、子どもが、意欲的・主体的に「やりたい!」「やってみたい!」という思いを持てたものも含めて夢としてとらえ、今の自分から夢までの道のりが、近くても遠くても、子ども自身が楽しみながら「一歩先」へ進めるサポートを「夢育」と捉えることとした。

なお、子どもが「夢」を常に持っていることは難しい場合もあり、しんどさを感じたり、夢や目標を持たず苦しい時期を過ごしたりするときには、立ち止まってもよいことに留意する必要がある。

第2 現状と課題

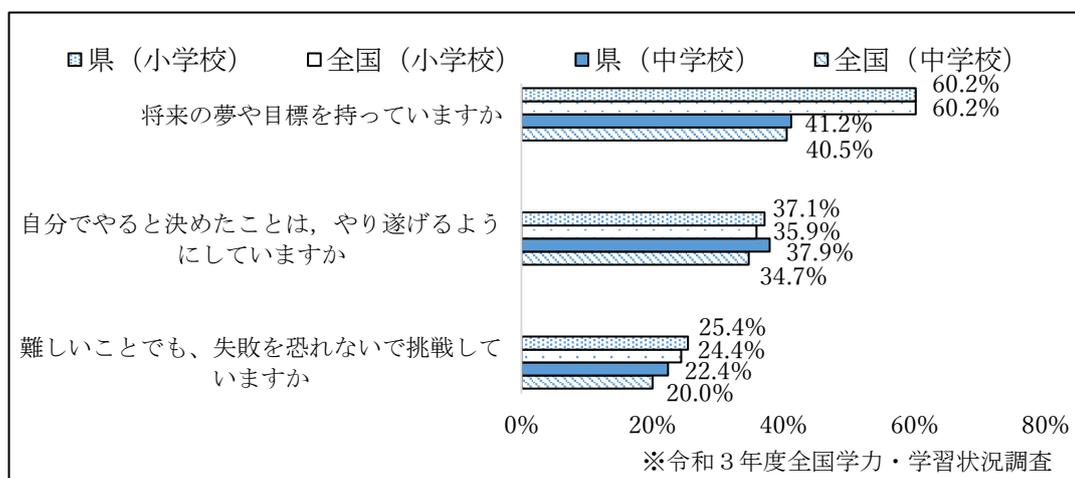
諮問事項に係る3つの視点について、全国学力・学習状況の調査結果等を踏まえ、その現状と課題を整理した。

視点①

1 子どもの意欲や主体性について

令和3年度全国学力・学習状況調査によると、本県で「将来の夢や目標がある」と回答した児童生徒の割合は、小学生で約60%、中学生で約41%に留まっている。また、自分で決めたことは、やり遂げることや失敗を恐れず挑戦する意欲や主体性は低い傾向にある(図1参照)。

図1 夢や主体性に関する項目に「当てはまる」と回答した児童・生徒の割合



2 豊かな体験活動について

子どもの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには、大人から与えられたものではなく、子どもの「やりたい!」「やってみたい!」という内的動機付けにより行われ、かつ、本物に触れたり、「見る」「触る」「味わう」といった直接的な体験、自分たちで計画して実行する活動（以下「豊かな体験活動」という。）が必要であり、こうした経験を通じて、子どもは自らの「夢」を育むことができる。

しかし、豊かな体験活動に結び付く可能性のある活動（図2参照）は、既に各団体や地域でそれぞれ個別に実施されているため、活動の実態や活動により育てたい力等の把握が難しい。また、地域により活動状況が異なる上、就学前の子どもや高校生を対象とした活動は、小学生から中学生を対象とした活動と比べると少なく（図3参照）、年代により偏りがある。

そもそも、体験活動の機会は、家庭や本人が希望して得るものであるが、体験活動へ参加していない児童の割合は、4割を超え（図4参照）、同じ地域・年代であっても、その機会に差（以下「体験格差」という。）が生じている（図5参照）。

図2 夢育に関係した活動の種類別割合

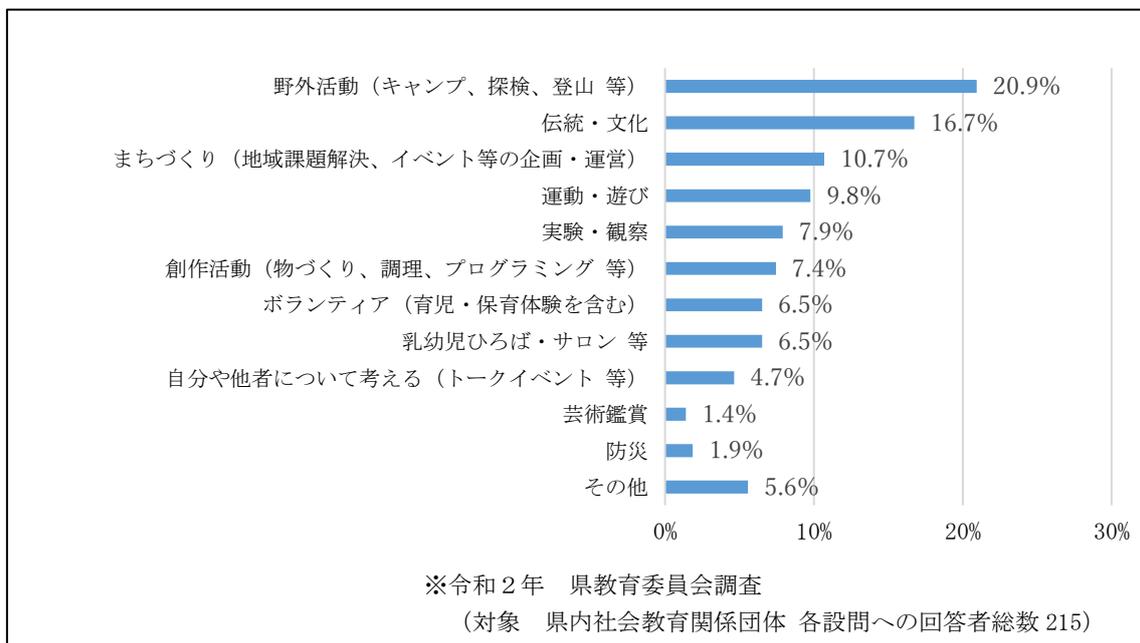


図3 年代別夢育に関係した活動状況一覧（団体種別）

		0～2歳	3～就学前	小学校 1～3年生	小学校 4～6年生	中学生	高校生
民間	NPO等	18	15	29	28	19	13
	関係団体		1	18	17	13	1
	企業	1	4	6	9	7	2
	合計	19	20	53	54	39	16
行政	社会教育施設	2	8	20	25	13	4
	公民館		1	8	10	16	9
	地域学校			18	19	1	
	その他市町村			2	3	4	2
	合計	2	9	48	57	34	13
全体		21	29	101	111	73	29

※令和2年 県教育委員会調査（対象 県内社会教育関係団体）

図4 公的機関等が行う行事への参加

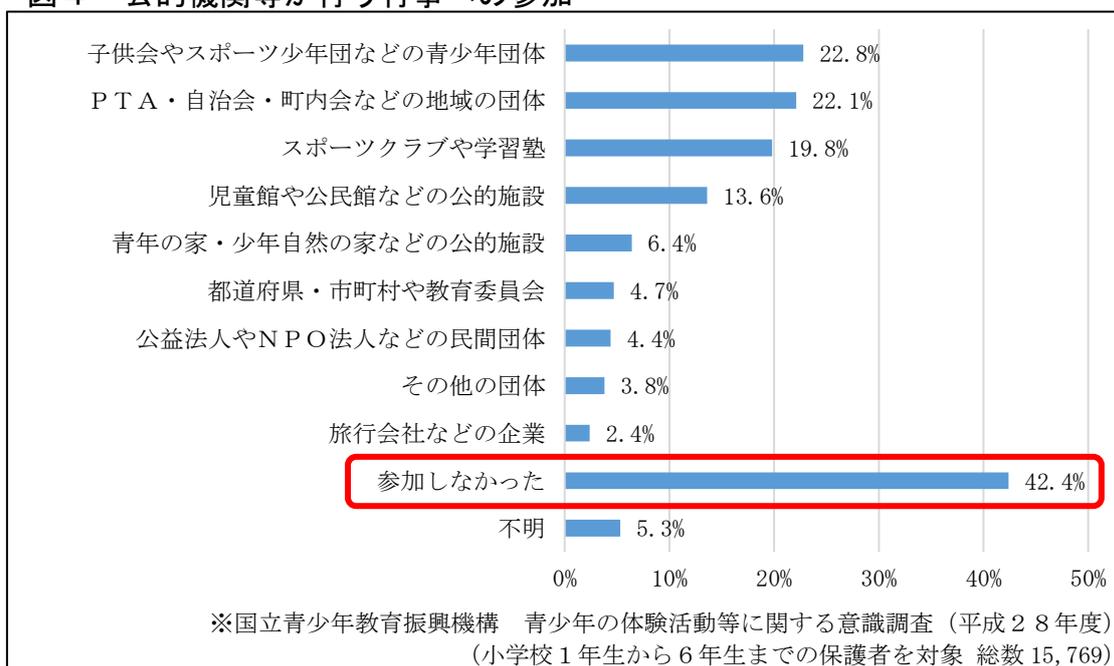
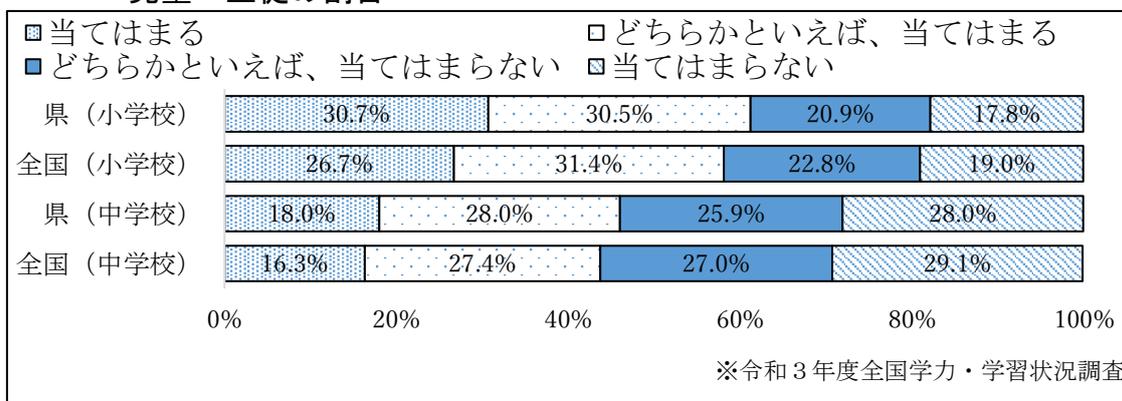


図5 「今住んでいる地域の行事に参加していますか」の質問に回答した児童・生徒の割合



視点② 視点③

3 地域と学校の連携・協働について

小学校で6割程度、中学校で4割程度の学校が、地域と連携・協働する何らかの取組を行っており、コミュニティ・スクールや地域学校協働本部の設置数は増加傾向であるが、その仕組みを活かして地域と協働する割合は、小学校では5割未満、中学校では3割程度である（図6参照）。

地域と学校が連携・協働した取組は、現状では「登下校の安全指導」、「校内環境整備」、「授業補助」などの学校支援・学習支援が中心である。また、職場体験等により企業と連携する取組は、中学校で5割程度あるものの、「文化・芸術」「自然体験」等の豊かな体験活動に結び付く可能性のある取組の実施率は、小・中学校ともに低い状況である（図7参照）。

学校現場では、地域と連携・協働する上で、「教職員の余裕がない」、「コーディネーターの後継者がいない」、「学校のニーズに合ったボランティアがない」等が課題と感じられており（図8参照）、多忙な教職員に代わり、学校のニーズに合った団体等とのマッチングや豊かな体験活動をサポートする人材の確保が課題である。

また、学校側は、地域と連携・協働することについて効果を感じているが、地域側への効果は学校側に比べると分かりにくい状況である（図9参照）。

なお、令和5年度以降、中学校において休日の部活動の地域移行¹が段階的に実施される予定であり、地域と学校の連携・協働がより一層求められている。

¹令和2年9月1日文科科学省「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」

図6 地域とのつながりに関する項目に「当てはまる」と回答した学校の割合

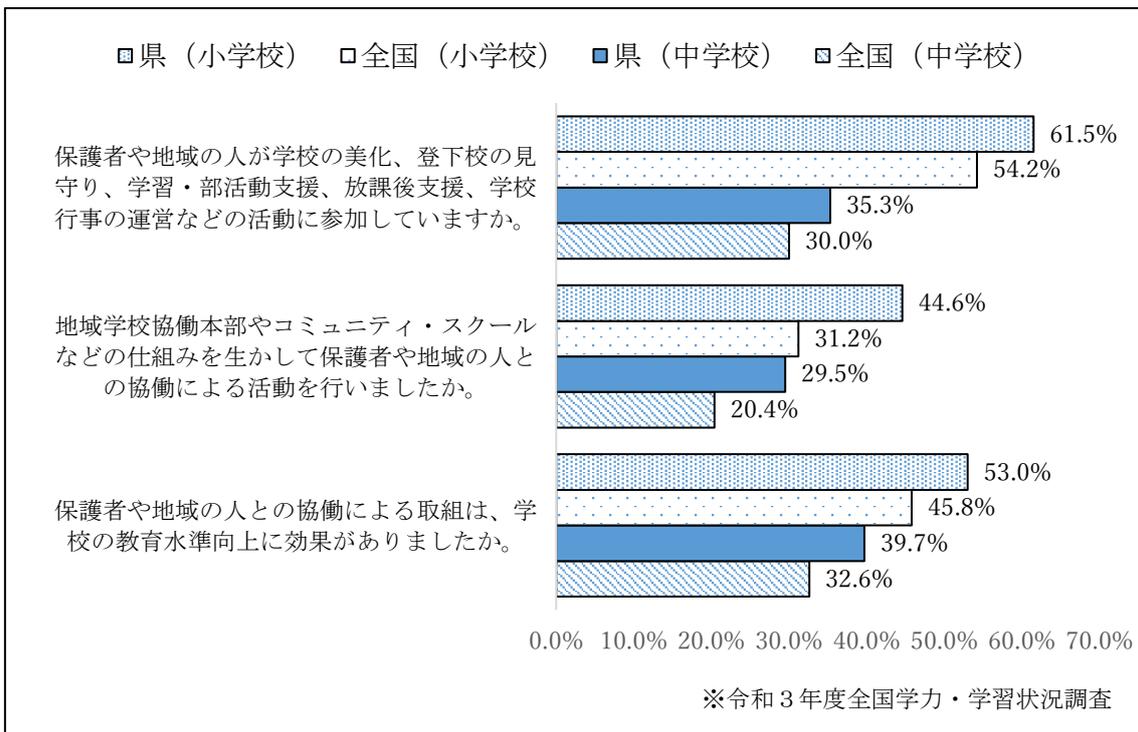


図7 地域と連携・協働した取組の実施率

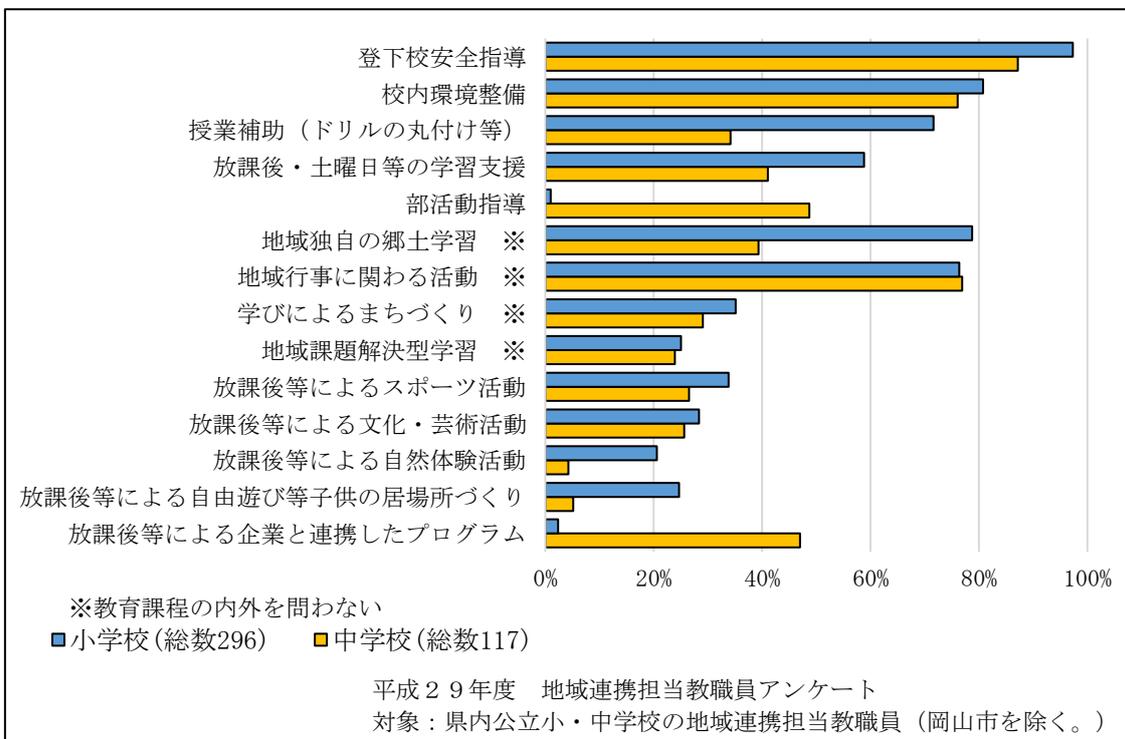


図8 地域と連携・協働する取組の中で課題と感ずること

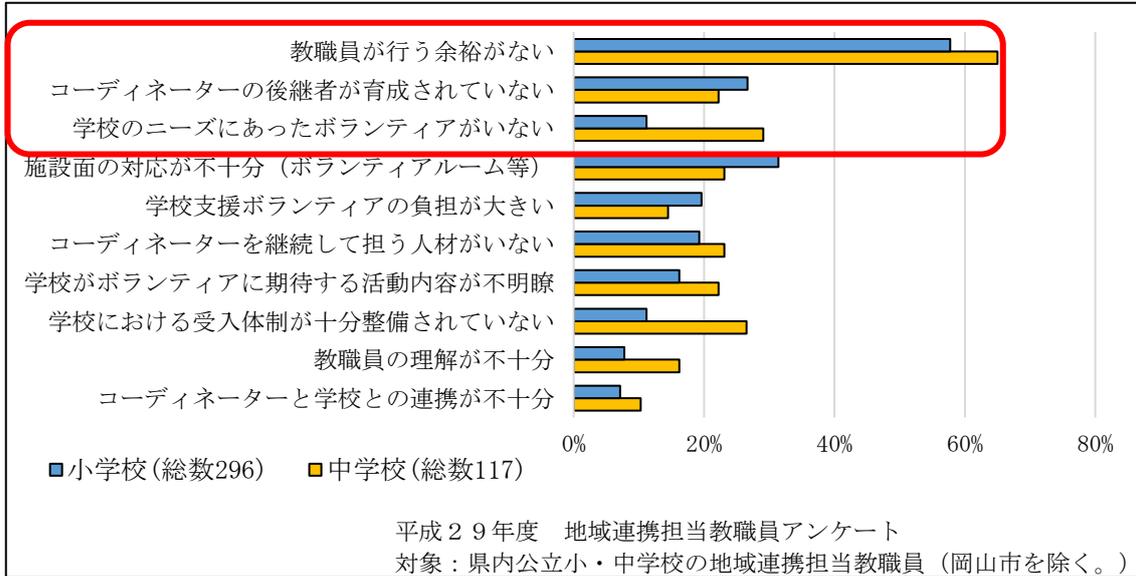
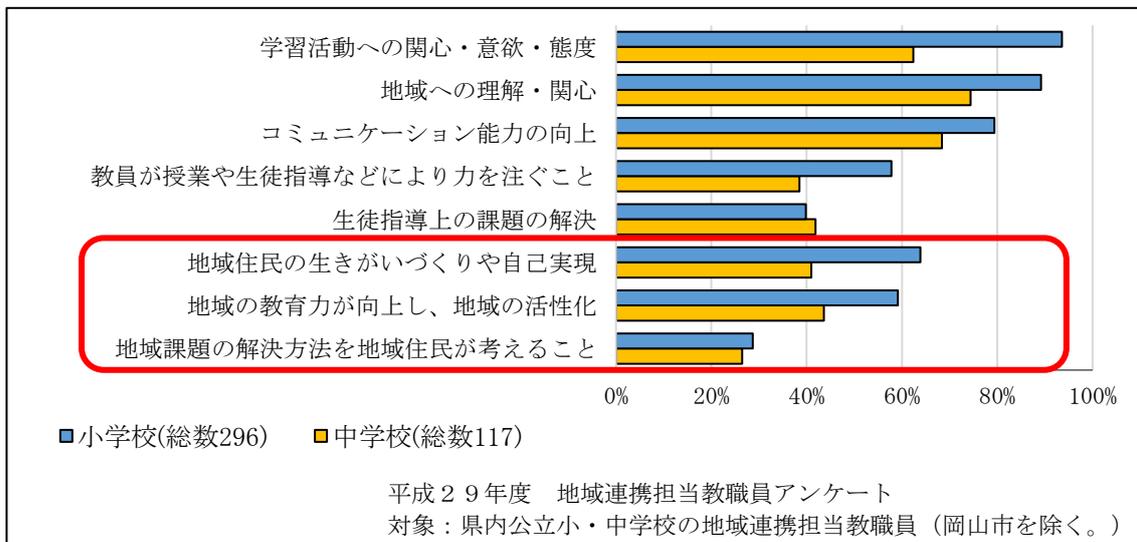


図9 地域と連携・協働することで効果があったと感ずること



第3 仮説の設定

本審議会では、第2現状と課題を踏まえ、次のような仮説を設定し、検証することとした。

諮問事項の視点①②に対して

仮説1

地域と学校の連携による豊かな体験活動を推進するとともに、体験格差を是正していくことによって、子どもたちの意欲や主体性等を育むことができるのではないか。

諮問事項の視点③に対して

仮説2

子どもたちの育ちに地域の大人が主体的に関わることで、子どもだけでなく大人も共に成長することができるのではないか。

第4 モデル校等による事例検証

体験格差を是正し、全ての子どもが豊かな体験活動を行う機会を確保していくには、学校の間を活用し、教育課程内で子どもたちが豊かな体験活動に触れる機会を設けることや、体験格差が生まれやすい放課後や休日などの教育課程外で、誰もがアクセスしやすい学校や身近にある公民館等の社会教育施設の間を活用し、豊かな体験活動に触れる機会を設けることが望ましいため、第3の仮説について、県内の小・中学校等の取組をもとに検証した。

学校の間を活用した地域と学校の連携・協働による取組事例

1 教育課程内	(1) 笠岡市立笠岡東中学校 (検証モデル校) (2) 浅口市立寄島小学校 (3) 真庭市立八束小学校
2 教育課程外	玉野市地域子ども ^{がっきゅう} 楽級

1 教育課程内

(1) 笠岡市立笠岡東中学校(検証モデル校)

ア 概要

笠岡市のまちづくりや地域活性化等の課題について、そこに携わる地域の人々の思いや願いを踏まえて、課題や興味の内容が同じ生徒同士が小グループを結成し、全17の学習テーマを設定した。生徒は多様な地域の人々と関わり合いながら、フィールドワーク等の体験活動を通して、将来にわたる笠岡市の地域活性化の具体的な方策等を考え、提案するとともに、実際に課題解決に向けた取組を行った。

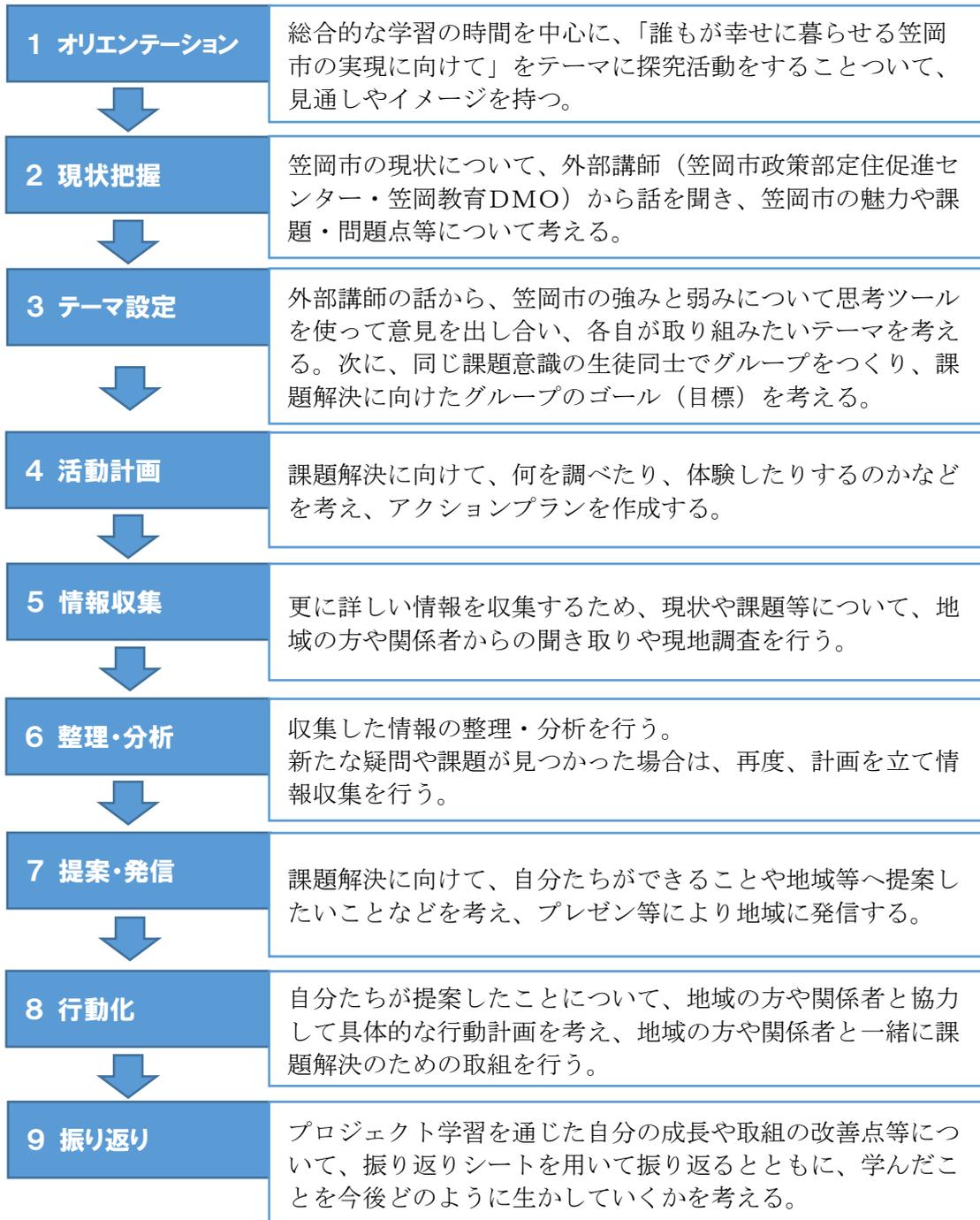
イ 目的

生徒が地域の人々と関わり合いながら、「誰もが幸せに暮らせる笠岡市の実現」に向けた取組を行い、地域の一員としての自分の生き方を考えるとともに、プロジェクト学習²を通じて、「自分を高める力」などの非認知能力³を高める。

² 生徒が設定した学習テーマに対し、調査や体験を通じて課題解決の方法を考えたり、実際に課題解決に向けた取組を行ったりする学習手法

³ 「自分と向き合う力」「自分を高める力」「他者とつながる力」「地域とつながる力」等、測定できない個人の特性による能力

ウ プロジェクト学習の流れ



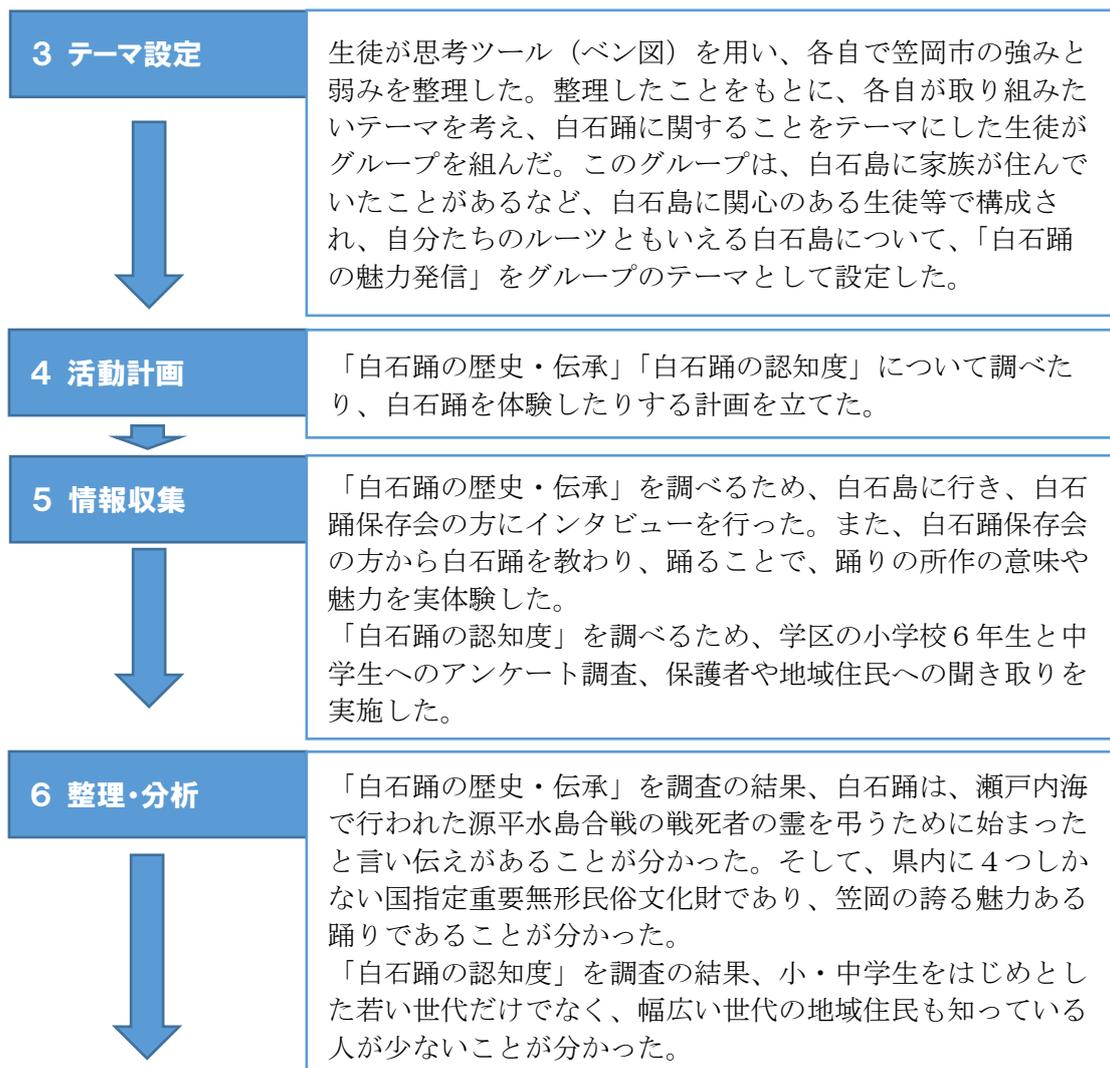
プロジェクト学習の17テーマ

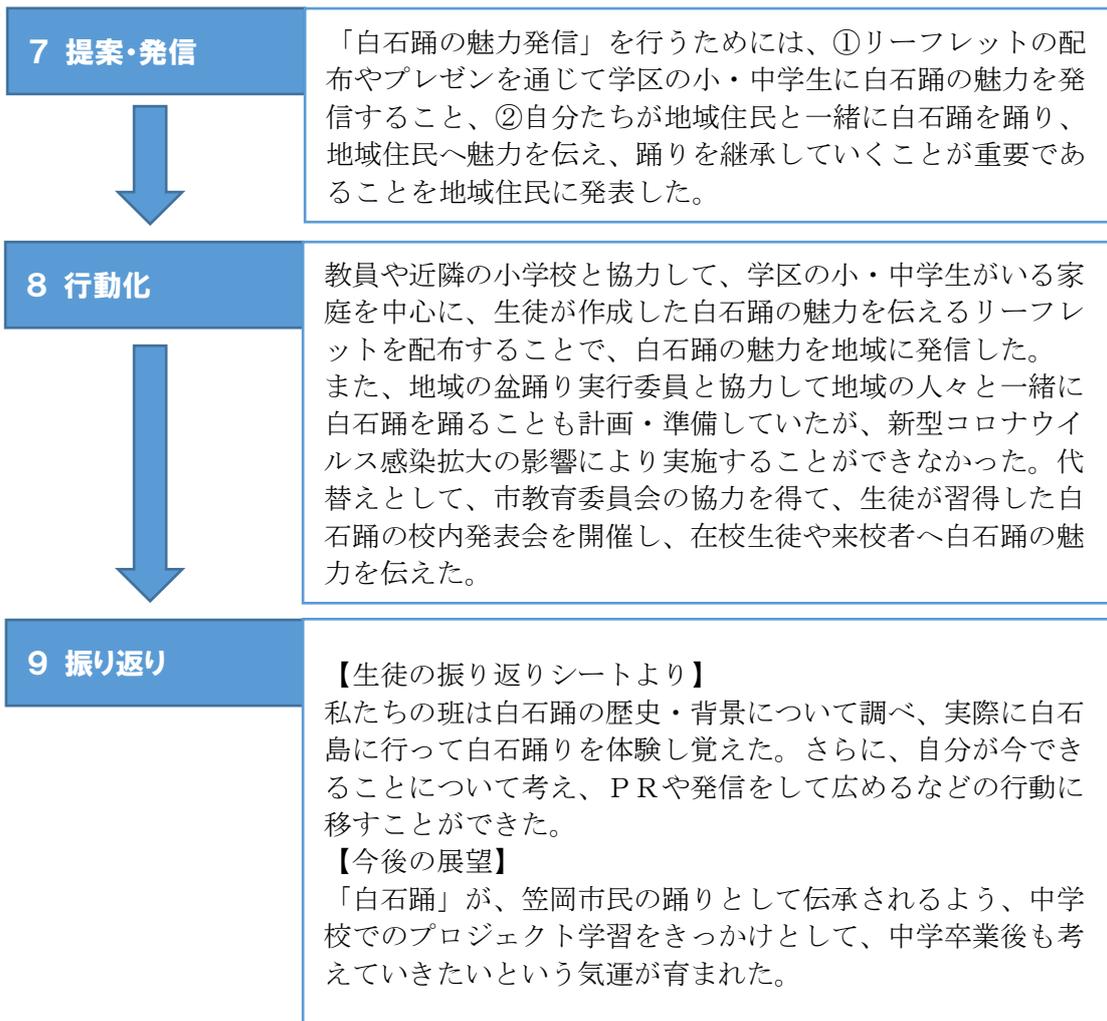
<ul style="list-style-type: none">・ 白石踊の魅力発信・ 真鍋島の魅力・ 北木島の魅力・ 飛島の魅力・ 大飛島の現状と課題・ 笠岡の歴史・ 笠岡の自然を守ろう・ 生き物の生態・ 笠岡の食の魅力	<ul style="list-style-type: none">・ 笠岡の飲食店を盛り上げよう・ 笠岡観光プロジェクト・ 空き家を使って商業施設をつくる計画を立てる・ 笠岡市の公共施設・ 笠岡市の公共事業・ 若い世代の人口を増やすために・ 笠岡市の人口を増やす・ 岡山県の詐欺について
---	---

更に学習の詳細を知るため、上記の学習テーマのうち、「白石踊の魅力発信」学習の詳細を取り上げる。

エ 「白石踊の魅力発信」学習の詳細

「白石踊の魅力発信」のプロジェクト学習の流れ3～9について、紹介する。



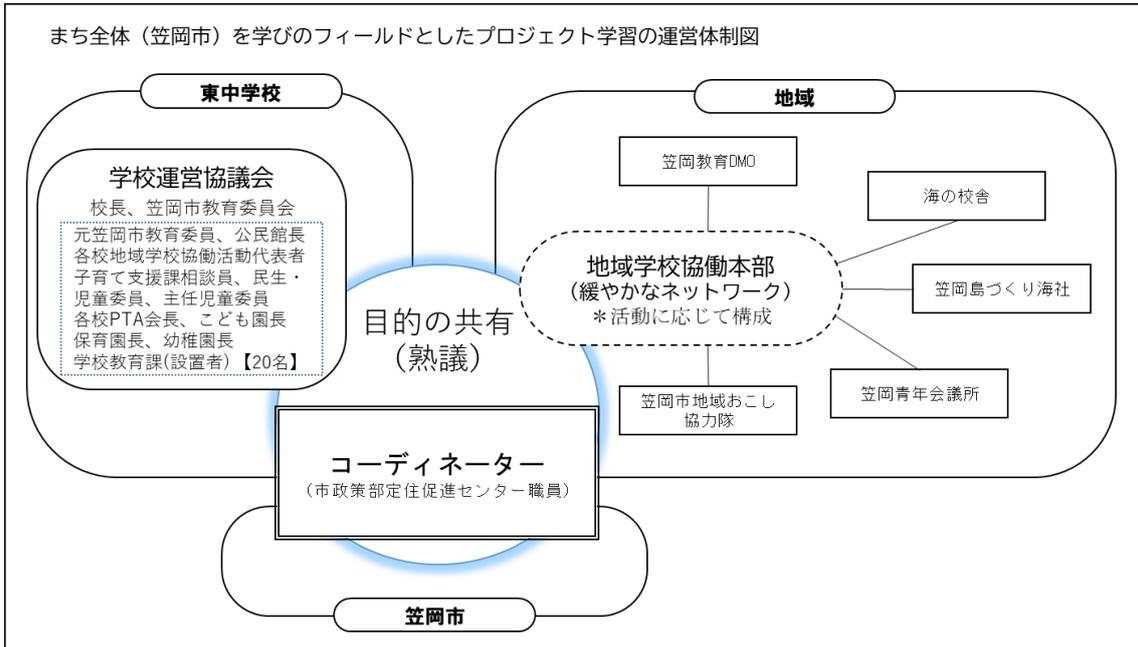


オ 運営体制

目的の共有

学校運営協議会を通じて、地域と学校で取組についての共通理解を図った。取組を進めていくに当たり、まち全体（笠岡市）を学びのフィールドとして生徒の非認知能力を高めたい学校側の思いと、学校を核として地域の活性化を図りたい地域側の思いが一致し、笠岡市政策部 定住促進センターの職員がコーディネーターとなり、笠岡教育DMO、海の校舎、笠岡島づくり海社、笠岡青年会議所、笠岡市地域おこし協力隊など地域の関係者にプロジェクト学習の趣旨を説明し、協力を働きかけるなど、学校との連絡・調整を行った。

図 10 笠岡市立笠岡東中学校の運営体制図



非認知能力の育成—生徒・教職員・地域の関係者—

非認知能力を高めるため、地域と学校の関係者は、学習活動の目的や生徒の学習活動を価値付ける方法を共有し、同じ視点で生徒と関わった。

- 笠岡東中学校区の小・中学校の教職員が「9年間で育てたい力」を整理した。さらに、生徒の行動に価値付けを行うため、それぞれの育てたい力に対して、発達段階に応じた行動指標（別紙資料編参照）を作成し、生徒や地域の関係者に示した。

〈9年間で育てたい力〉

自分と向き合う力			自分を高める力		他者とつながる力		
自分をコントロールする力	粘り強さ	主体性	挑戦力	コミュニケーション力	思いやる力	協力・協働	

- 生徒は、学習活動を通じて自分が育てたい力を選択し、そのために何をがんばるか等の行動目標を設定し、学習活動の事前と事後で自己評価を行った。
- 教職員と地域の関係者は、生徒が設定した行動目標や振り返り等を共有し、生徒の言動を見取り、具体的な声掛け等、生徒の活動に価値付けを行った。

カ 結果（アンケート結果より）

- ① 17のテーマでプロジェクト学習を行う3年生に「自分を高める力」と「地域への愛着心」に関連した項目について、プロジェクト学習の実施前後にアンケート（図11）を実施した。

図11 笠岡市立笠岡東中学校の生徒アンケート

○生徒（3年生）アンケート総数・・・105			事前	事後
主体性、 挑戦力 (粘り 強さ) ↓ 自分を 高める力	1	一度取り組み始めたことは、あきらめずに続けることができる	61.6%	72.0%
	2	一度やりとげたことを、さらに続けてみたいと思うことができる	53.5%	70.9%
	3	ふだん努力していることを、別のことにも活かそうと思える	49.5%	62.4%
	4	具体的に目標を決め、その目標へコツコツと向かっていける	54.6%	62.4%
	5	いま取り組んでいるとことを、さらによりよくしようとする	58.6%	69.9%

※「とてもできている」「少しできている」「どちらともいえない」「あまりできていない」「全くできていない」の5件法での回答のうち、「とてもできている」「少しできている」と回答した生徒の割合

地域への 愛着心	6	自分の住んでいる地域のことが好き	3.58	4.01
	7	地域には良いところがたくさんある	3.37	4.03
	8	地域の行事に参加している	2.28	3.00
	9	地域や社会をよくするために何をすべきか考えたことがある	3.04	3.76

※「とてもあてはまる（5点）」「だいたいあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「全くあてはまらない（1点）」の5件法での回答した平均得点

（記述より）

- ・自分たちの提案や活動によって、多くの人々の考えを変えることができうれしかった。他の人に提案することに面白さを感じた。
- ・島で過疎化が進んでいることを知り、島や市が一丸となって、改善・工夫されていけば良いと思った。若い世代が何をすれば良いか考えるようになった。
- ・自分が求めるだけでなく、何が自分にできるのかを考えないといけないと思った。
- ・学習前は地域に興味が無かったけれど、学習後は自分の地域に少し興味を持ち、地区清掃に参加した。
- ・海にゴミがたまっていたので、ゴミ捨て場まで運んだ。

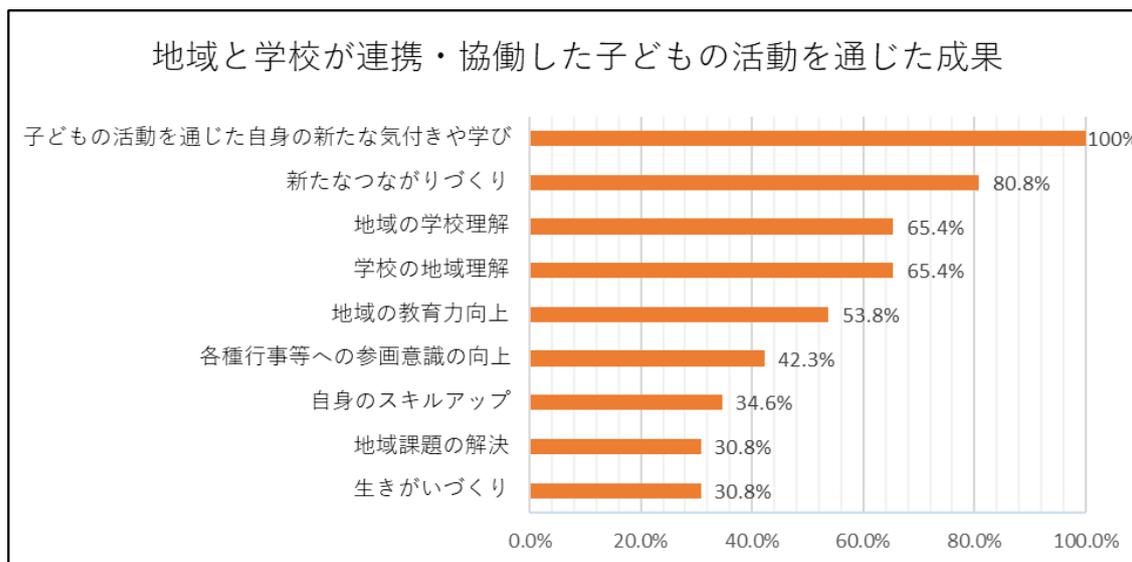
- ・ 地元の食材を買うようになった。
- ・ 自分たちの提案から、市の方にスケートパークのセクションを作ってもらった。

② この学習活動や企画に関わった地域の関係者や教職員に対し、アンケート調査（図 12、13）を行った。

図 12 笠岡市立笠岡東中学校の地域の関係者アンケート

○地域の関係者 アンケート総数・・・26			事前	事後
相互理解	1	子どもの成長や夢を育むには、地域と学校が連携した活動が必要だと思う	4.35	4.81
	2	学校の取組や活動を知っている	2.96	4.04
	3	学校が困っていることや課題を知っている	2.85	3.62

※「とてもあてはまる（5点）」「だいたいあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「全くあてはまらない（1点）」の5件法での回答した平均得点



※「地域と学校が連携・協働した子どもの活動を通じた成果」についての問いに対し、選択回答のあった人数の割合（事後調査のみ）

（記述より）

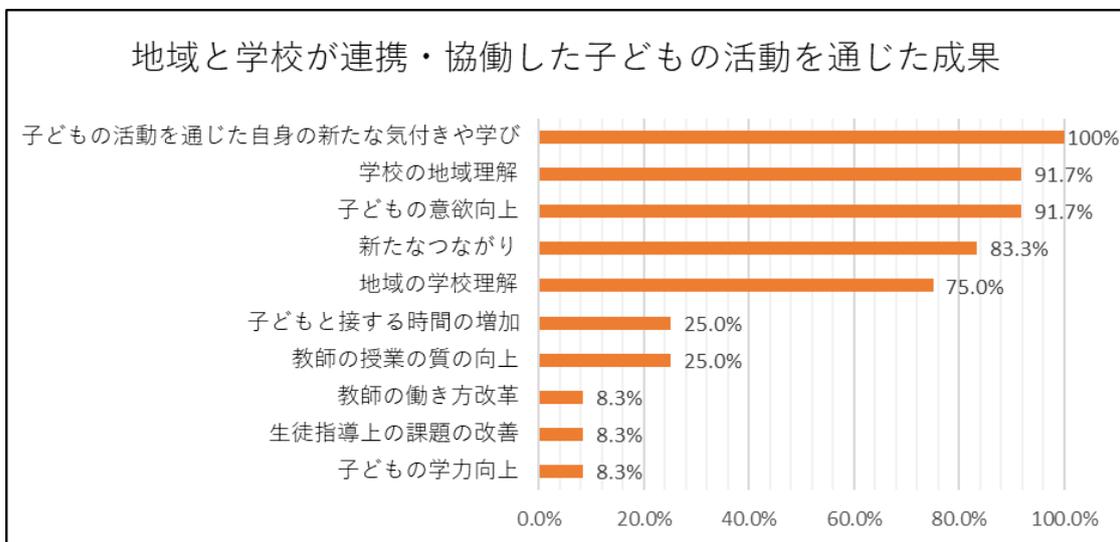
- ・ 地域と学校の人と人のつながりが生まれ、教育活動が活性化している。地域全体で地域を愛する子どもを育てていきたい。
- ・ 地域をより良くする活動に子どもたちにも加わってもらい、文化や環境を大切にすることと、それを継承する方向に持っていかれたらと思う。
- ・ 学校だけでなく、地域の力で子どもたちを育てていきたいと思った。
- ・ お互い（地域・学校・子ども）の良いところの共有が必要だと思う。

- ・ いろいろな場面で活躍されている方々の子どもたちに対する思いを聞け、自分自身の視野を広げることができた。

図 13 笠岡市立笠岡東中学校の教職員アンケート

○教職員 アンケート総数・・・12		事前	事後	
相互理解	1	子どもの成長や夢を育むには、地域と学校が連携した活動が必要だと思う	4.25	4.83
	2	地域は学校の取組や活動を知っている	3.08	3.83
	3	地域は学校が困っていることや課題を知っている	3.08	4.08

※「とてもあてはまる（5点）」「だいたいあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりあてはまらない（2点）」「全くあてはまらない（1点）」の5件法での回答した平均得点



※「地域と学校が連携・協働した子どもの活動を通じた成果」についての問いに対し、選択回答のあった人数の割合（事後調査のみ）

（記述より）

- ・ 活動をする中で、地域のことについていろいろわかってきた。子どもたちも同じように感じているのではないかと思う。
- ・ 教員が地域のことを知らないとな生徒に伝えられない。だからこそ、地域学を進めていく上で地元の方との連携はとても大切であると思った。
- ・ 生徒の教員以外への関わり方を通じて、社会に出たときに必要になるコミュニケーション力を学べたことが大きな収穫であった。
- ・ 生徒が地域の課題や魅力に目を向けることができ、有効な活動であったと思う。家族や教員以外の大人との関わりも貴重な体験になると思う。

キ 取組の検証

①仮説1に対する検証

〈成 果〉

- ・ 熟議の中で、教職員と地域の関係者が、プロジェクト学習の目的や生徒の活動を価値付ける方法を共有したことで、教職員や地域の関係者が生徒の成長に気付き、具体的な声掛け（フィードバック）を行ったことで、生徒は自分の成長を感じやすくなり、主体性の向上へとつながった。
- ・ 地域と学校が連携・協働したプロジェクト学習を通じて、在籍生徒全員に豊かな体験活動に触れる機会が確保され、体験格差の是正につながった。
- ・ プロジェクト学習を実施するに当たって、まち全体（笠岡市）を学びのフィールドとして生徒の非認知能力を高めたい学校側の思いと、学校を核として地域の活性化を図りたい地域側の思いを一致させたため、コーディネーターを中心として、数多くの地域の関係者を巻き込んだ取組を実施することができた。
- ・ 17 グループごとに行うプロジェクト学習は、多くの地域の関係者へ取組の説明等や、協力を働きかけるなどの連絡・調整が多岐にわたり、コーディネーター役の負担は大きい。アンケートの結果では、笠岡東中学校においては教職員の負担感に意識の変化は認められないが、行政職員が業務としてコーディネートすることで、可能な限り少ない学校負担で豊かな体験活動を提供することができた。
- ・ プロジェクト学習を通して、中学卒業後も笠岡市の魅力等について考えていきたいという気運が生徒に育まれた。また、一部の生徒には、行動変容が認められた。

〈課 題〉

- ・ 教育課程内の総合的な学習の時間を中心とした学校の活動のため、時間的な制限があったり、活動内容にある程度の制限が生じたりする。子どもが興味や関心を持ち、より深く探究活動を行うためには、学校教育と社会教育が連携し、公民館や放課後・休日等に行われる取組へとつなげていくことが必要である。
- ・ 生徒が地域へ出向く際の引率は、休日や長期休業日に教職員が行っているが、持続可能な取組とするためには、地域の人や保護者を含めた運営・体制づくりが必要である。
- ・ 生徒の活動内容や場所によっては交通費が必要となるため、費用負担等の検討が必要である。

②仮説2に対する検証

〈成 果〉

- ・ 地域全体を学びの場として学校の場を活用し、地域課題について、地域と学校が連携して取り組むことは、地域の教育力向上に有効な活動である。
- ・ 生徒の学習を通して、学習に関わった大人も地域のことを再発見できるきっかけとなった。
- ・ 地域と学校が連携・協働することにより、地域の関係者と教職員の相互理解が進み、新たなつながりづくりに役立った。

〈課 題〉

- ・ 学校と保護者や地域住民との関わりはあまり多くなかったため、保護者や地域住民を含めた熟議を行うことで、より多くの人に関わることができるようにする必要がある。

(2)浅口市立寄島小学校

ア 概要

寄島の魅力である「海」をテーマにSDGsの視点を取り入れ、地域と学校が連携・協働した「寄島に親しむ」「寄島を知る」「寄島を見つめる」「寄島に貢献・還元する」などの学習活動（地域に開かれた教育課程「よりしま学」）の中で、豊かな体験活動を行っている。保育活動（5歳児）、生活科・総合的な学習の時間（小・中学生）を核として実施している。

イ 目的

地域と学校が連携・協働した「よりしま学」を通じ、主体的に問題解決に関わる意欲やコミュニケーション力等の非認知能力やふるさとへの誇りを持つ子どもを育成する。

ウ 主な活動内容

よりしま学（主に総合的な学習の時間で実施）

学年	テーマ	内 容
1年生 25人	大好き わたしたちの よりしま	<ul style="list-style-type: none">・海岸散策や砂遊び、ビーチフラッグなど海に関係した遊びを地域ボランティアと行った。・海岸散策の際に拾った廃材を使った工作を図工の時間に行った。
2年生 26人	とび出せ！よりしま の町へ	<ul style="list-style-type: none">・寄島の町を知るために、町探検に出かけ、町の商店で働く方や漁港で働く方などにインタビューを行った。・店の方の協力を得て、スーパーの棚卸しや電気店での懐中電灯の解体作業などを体験した。
3年生 24人	とび出せ！よりしま の海へ	<ul style="list-style-type: none">・カキの養殖についてのやりがいや苦勞、寄島のカキのおいしさの秘密などを漁業組合の方にインタビューし、まとめた。・漁業組合の協力を得て、カキの種付けや収穫を体験したり、カキの成長の様子を観察・記録を行ったりした。・水揚げされたたこや魚などを実際に触らせてもらうなどもした。

4年生 28人	守れ！寄島の海と人	<ul style="list-style-type: none"> ・海岸や海のゴミの現状について、漁業組合や地域の方へ聞き取りを行ったり、調べたりした。 ・調べる中で、マイクロプラスチックの存在を知り、NPO 法人グリーンパートナーや山陽学園などの協力も得て、マイクロプラスチックの有無を調べる実験を行った。 ・調べたことを「自分たちにできること」として地域に発信した。
5年生 29人	発信！寄島の魅力	<ul style="list-style-type: none"> ・行政やNPO法人などの協力を得て、本州で寄島地区にしかないアッケシソウの保護活動を行ったり、シーカヤック体験をしたりした。 ・フィールドワークを行い、地域住民への聞き取りをしながら寄島の魅力についてまとめた。 ・寄島の魅力を幅広く伝えるために、マスコットキャラクターをつくりたいという声が子どもたちから上がり、学校運営協議会で提案した。
6年生 29人	未来へ 寄島歴史探検	<ul style="list-style-type: none"> ・寄島地区に関係した歴史について、フィールドワークをしたり、文化財保護委員や郷土資料館長、宮司等にインタビューなどを行ったりした。 ・調べた内容について、オンライン歴史百科事典「ヨリペディア」を作成し、ホームページに公開した。

エ 運営体制

- ① 令和元年10月に小・中学校で学校運営協議会を設置。令和2年度から寄島地区にある保育園・こども園・小学校・中学校の4校園の「寄島学園コミュニティ・スクール」として保こ小連携活動及び小中一貫教育を推進している。

図 14 寄島学園の運営体制図



(寄島小学校作成)

- ② 学校運営協議会の下部組織として、「学びづくり部会」「心と体づくり部会」「絆づくり部会」の3部会を設け、よりしま地域学校協働本部と連携・協働した活動を行っている。
- ③ 学校運営協議会と連動した学校組織体制づくりを編成している。組織体制については、小学校内に全教職員による4つのプロジェクトチーム(学び・心と体・絆・ワークスタイル)を設置し、その内「学び」「心と体」「絆」の3チームが寄島学園コミュニティ・スクールの下部組織である3つの部会「学びづくり部会」「心と体づくり部会」「絆づくり部会」と連動するように構築することで、学校経営と学校運営協議会との連動が進むような仕掛けづくりを行っている。

図 15 寄島学園コミュニティ・スクールと連動した組織体制



(寄島小学校作成)

オ 「寄島っ子の未来を考えるワークショップ」(熟議)の開催

地域と学校が思いや目標を共有し、地域みんなで子どもを育てていくために、保育園・こども園・小学校・中学校の教職員、PTAや地域住民、児童生徒の代表が参画し、熟議を行った。テーマについては次のとおり。

- 1回目「育てたい子どもの姿(なりたい大人の姿)」について
- 2回目「「よりしま学」の開発へ向けて」について
- 3回目「寄島っ子のできている非認知能力」について
「できるようになってほしい非認知能力」について

カ 非認知能力の育成

活動の実施に当たり、教職員の校内研修で、子どもが自身の良さに気づき、前向きに取り組むための行動指標(別紙資料編参照)を作成した。また、前出のワークショップの中でも非認知能力について扱い、地域住民も非認知能力について学んだ。ワークショップで共有した内容については、整理してCS通信で全保護者や地域住民に発信した。

キ よりしまみつけ隊の取組

教育課程内の取組である「よりしま学」をきっかけとして更に地域での学びを深めるために、令和3年7月に地域学校協働本部が中心となり、「よりしま！みつけ隊」を設立し、地域の大人のサポートにより放課後や休日に子どもたちの自発性を尊重した活動を行っている。小・中学生の希望者15人程度と地域住民(地域学校協働活動関係者)で構成されている。

設立当初は、「遊び」「体験」「物づくり」の3グループでスタートし、「サッカー」「シーカヤック」「自由工作」等を楽しんだ。

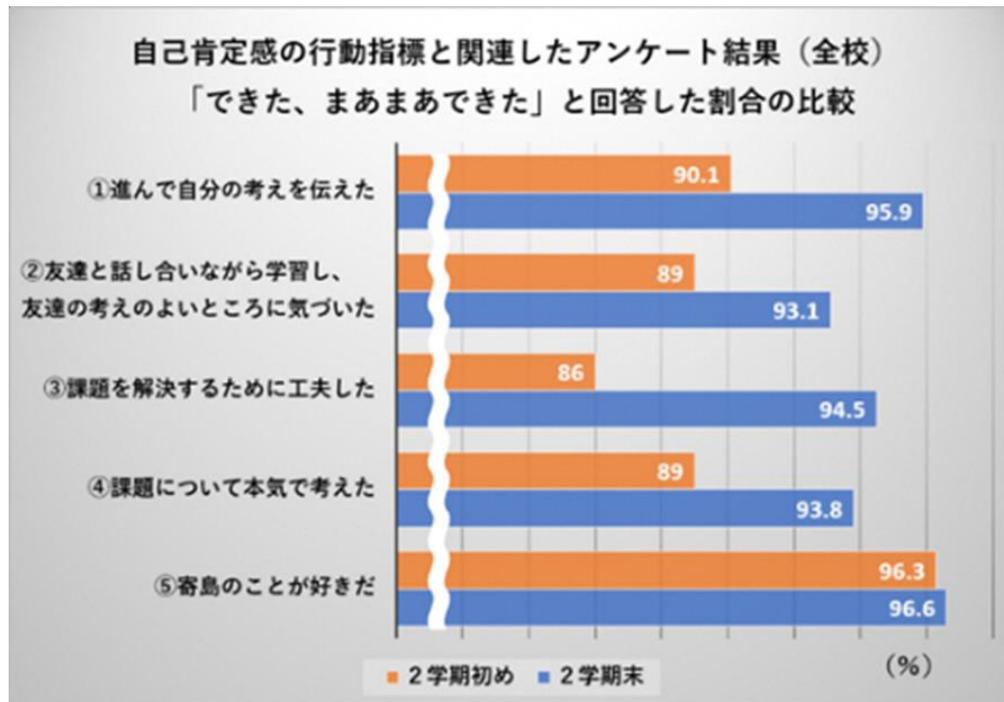
1回目の活動を受けて、井原市内の中学生と高校生の希望者で構成されたグループ「Team 夢源」(「ふるさと井原をベースに「自分たち」も「ふるさと」も魅力的な「ひと」や「まち」になるような活動」を行う)のメンバーを招いて、活動の様子や活動に対する思いを聞いたり、ワークショップを行ったりした。ワークショップが刺激となり、参加した子どもや大人には、次のような新たな活動が生まれてきている。

- ・ 寄島の魅力をカレンダーにして公共施設へ寄贈した。(商品化も検討)
- ・ 寄島の魅力を発信する動画「よりしま散歩」を作成中
- ・ 保育園・子ども園との交流活動を計画中
- ・ 地域イベントの開催を計画中
- ・ ものづくりを行い、地域のお年寄りへプレゼントし、一部を商品化して販売することを計画中

ク 結果 (浅口市立寄島小学校長への聞き取りより)

○活動が自己肯定感に及ぼす効果のアンケート調査及びその分析を行い、次のとおりの結果であった。

図 16 自己肯定感の行動指標と関連したアンケート結果（全校）



（寄島小学校作成）

- 地域に開かれた教育課程「よりしま学」を通して、地域の方とともに、地域の教育資源「ひと・もの・こと」を学ぶことや、授業の中で「寄島小の自己肯定感」の意識づけを行う取組等が、子どもの学習意欲や主体的な学びへつながる一助となった。
 - 5歳児から中学3年生までが同じテーマで系統的に学習を行うことで、学びの連続性を確保した。
 - 子どもの発達段階に応じて、身近な教育資源を活用した指導計画を作成し、地域の方とともに地域を探究する活動を行うことにより、子どもがホンモノ体験や直接体験を行うことができた。
 - 寄島町に暮らす小学生・中学生・高校生の希望者で「よりしま！みつけ隊」を結成し、「自分たちの力で実現すること」をモットーに、寄島を楽しみ、寄島の魅力を伝える活動（教育課程外）を自分たちで企画・交渉・準備・運営等を行うことにより、自己肯定感や地域への愛着心、コミュニケーション力等を育むことができた。
 - 「よりしま！みつけ隊」での寄島の魅力を発信する活動を通じて、小学4年生から高校生までの子どもたちに新たなつながりが生まれるとともに、それを地域の大人がサポートすることで、新たに地域の緩やかなネットワークが構築された。
- 教職員や学校運営協議会委員の目的意識及び当事者意識に差があるこ

とから、関係者の意識を向上させていく必要がある。

- 学校運営協議会や熟議が形式的な会議とならないように、課題解決へ向け、会議運営の工夫をすることで、地域と学校がともに連携・協働の効果を実感し、持続可能な取組としていく必要がある。
- 地域学校協働活動推進員や地域ボランティア等が高齢化し、世代交代が進んでいない状況もあり、保護者をはじめ、幅広い世代の地域の方が参画しやすい地域学校協働活動を考えていく必要がある。

ケ 取組の検証

① 仮説1に対する検証

〈成 果〉

- ・ 「学校運営協議会」や「寄島っ子の未来を考えるワークショップ（熟議）」を通じて、地域住民と教職員、PTA、児童生徒の代表が、「育みたい子ども像（なりたい大人像）」や「育みたい非認知能力」等を共有し、目標を一致させたことで、地域ぐるみで、寄島の魅力を生かした活動を展開することができた。
- ・ 子どもにとって、地域の身近な教育資源をもとに、地域住民等とともに地域を探究したり、直接体験をしたりする活動は、子どもの意欲や主体性を育むために有効である。
- ・ 「よりしま学」を通じて子どもの意欲や主体性を育むために、行動指標を作成し、子どもにも示したことで、子どもが自身の良さや成長に気付き、意欲的に活動に取り組むことができた。
- ・ 子どもたちの自発性を尊重した活動を行う場合、子どもが具体的な活動内容や活動のゴールイメージを持つことが難しいため、先進的に活動している団体等と連携して事例を聞いたり、ワークショップを開催したりすることは有効である。
- ・ 学校運営協議会の組織と校内教職員の体制を連動させ、目標を共有したことで、地域と学校が効果的に連携・協働し、子どもに豊かな体験活動を提供することができた。

〈課 題〉

- ・ コロナ禍で、学校から地域への活動成果の発信がオンラインとなったため、次の活動へ結び付いていない状況である。感染状況を踏まえながらも、次の活動へ結び付け、取組を進めていく工夫をする必要がある。
- ・ 多様な人材が参加する熟議等を行い、協働活動が展開されているが、マンネリ化を防ぎつつ持続可能な取組としていくためには、学校づく

りと地域づくりの両方の視点を入れた熟議を行うなど、工夫していく必要がある。

② 仮説2に対する検証

〈成 果〉

- ・ 子どもを核とした活動に関わることで、新たな大人同士のつながりや子どもとのよりよい関係を作ることができ、生きがいややりがいへとつながる。
- ・ 地域学校協働本部の活動や「よりしま！みつけ隊」において、地域の多くの大人が関わり子どもの活動をサポートした。そのことを通じて、地域に新しい緩やかなネットワークが構築された。

〈課 題〉

- ・ 地域学校協働活動推進員や地域ボランティア等、地域と学校が連携・協働した活動に関わる方の多くが高齢者で、保護者世代の地域の活動を通じたつながりづくりや大人の学びへと発展しにくい状況にあるため、地域学校協働活動にPTA等を含めた幅広い世代の参画の工夫が求められる。

(3)真庭市立八束小学校

ア 概要

全校児童を対象に、「八束の宝を学ぶ」をテーマとして、八束小学校区（蒜山）の文化や歴史、酪農業などについて、各分野で活躍する地域の専門家を招き、「聞く」「見る」「触れる」等の本物を体験する学習を行った。

イ 目的

- ・ 児童が、学区の素晴らしさを改めて実感し、地域への愛着を深める機会とする。
- ・ 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、児童・地域住民・保護者・教職員がともに学ぶ機会とする。

ウ 主な活動内容

① 八束の宝を学ぶ（総合的な学習の時間で実施）

外部講師を招いた学習は、参観日に合わせて実施し、保護者も一緒に学ぶ機会を設けることで、大人も子どもも地域への関心を深めた。

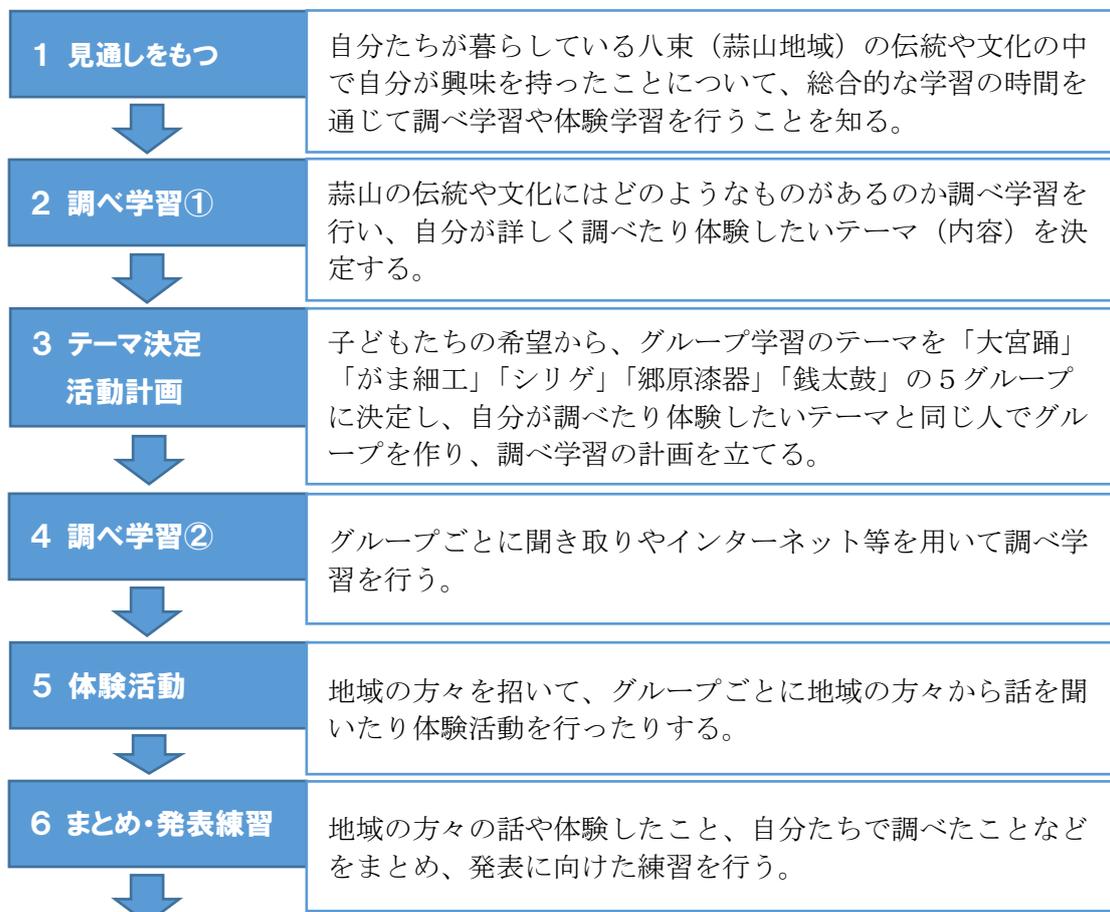
各学年の学習テーマ

学年	テーマ	活動に関わった地域の専門家
1年生	ジャージー牛について	蒜山イキイキ楽酪協議会 真庭家畜保健衛生所
2年生	蒜山の生き物・自然について	津黒いきものふれあいの里
3年生	蒜山の農業について	J A晴れの国岡山
4年生	ジビエについて	蒜山振興局 農業振興課
5年生	八束の食文化について	龍泉
6年生	八束の歴史について	蒜山郷土博物館

②「蒜山の伝統文化」を学ぶ（4年生）の取組

総合的な学習の時間に地域の方を招いて、蒜山の伝統文化「大宮踊」、
「がま細工」、「シリゲ」、「郷原漆器」、「銭太鼓」の5グループに分かれて、調べ学習や体験学習を行い、学んだことをグループごとにまとめた。

エ 学習の流れ（全23時間）



7 発表

自分たちの成果を3年生に発表することで、地域の良さを発信するとともに、次の学年での学習についての見通しを持たせる。

③「シリゲ教室」(5・6年生)

蒜山地区に伝わる国指定重要無形民俗文化財である「大宮踊」の伝承活動のひとつとして、「大宮踊」の際に灯籠の下に飾られる切り絵である「シリゲ」を、地域住民に教わりながら制作した。完成した作品は地域のコンクールに出品した。

④「トウモロコシ博士に学ぶ」(3年生)

「蒜山の農業」学習のひとつとして、蒜山の特産物であるトウモロコシの育つ仕組みや栽培の苦労などについて農家の方から学んだ。トウモロコシの皮むき体験、穂についている虫を観察するなど実物に触れたり、匂いを嗅いだりした。

⑤「親子防災ワークショップ」(全校児童：親子でともに学ぶ取組)

年間3回の土曜日授業を活用し、PTA研修育成部が中心となって、消防士や消防団員、防災士、市役所職員などの地域の外部講師を招き、親子で防災について学ぶワークショップを開催した。全校児童を通学班ごとの12グループに分け、「防災について学ぶ時間」と「防災グッズの作成や防災体験の時間」の2部構成で実施した。内容は次のとおりである。

第1部「防災について学ぶ時間」(講話とクイズ)

- ・火事と地震のお話
- ・消防団の活動について
- ・防災クイズ

第2部「防災グッズの作成や防災体験の時間」

(3つのブースを回る形式で実施)

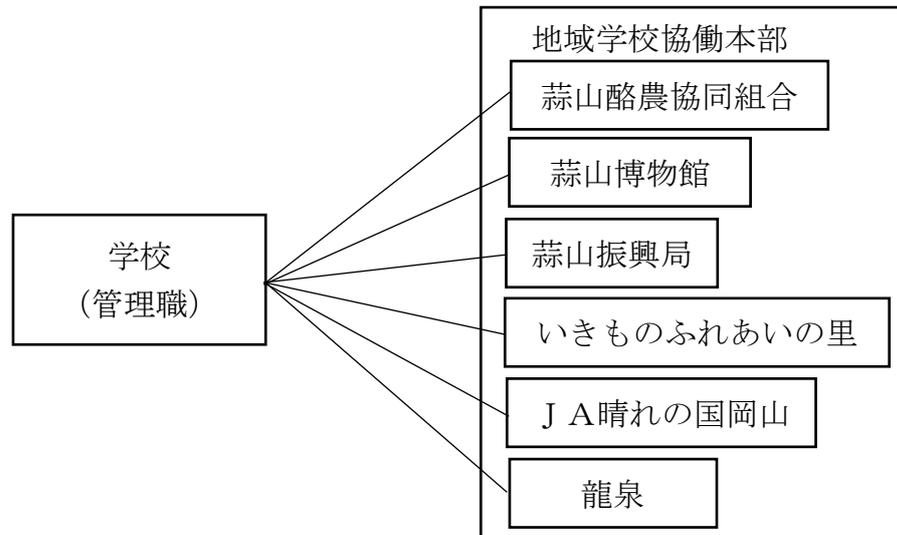
- ・煙中体験(図工室に機材を持ち込み煙の中を歩く体験)
- ・防災ボトル作り(エマージェンシーボトルの中に自分が必要だと思う防災グッズを選んで詰める体験)
- ・我が家のルールづくり(保護者と一緒に災害時のルールについて考える。)

オ 運営体制

① 地域学校協働本部を活用し、地域と学校が連携した活動を実施している。

② 「八束の宝を学ぶ」の活動に関わった地域の専門家との調整や打合せは、

学校と専門家等が直接行った。



カ 結果（真庭市立八束小学校長への聞き取りより）

- 本物体験による具体物との出会い（実物を見たり触れたりする）により、子どもたちの興味・関心を刺激し、知的好奇心を高めることができた。
 - 防災ワークショップでは、PTAと連携し、保護者とともに活動を展開できたことで、それぞれの実際の生活について親子で振り返りながら主体的に考えることにつながり、防災意識が高まった。
 - 「八束の宝を学ぶ」に関わることで、自分たち大人も知らなかったことを学べたり、新たな発見があったりした。
 - 活動を通じて子どもと関わることで、子どもたちから活力をもらい、元気になれた。
 - 大人が子どもと一緒に体験活動をしたり、学習を支援したりすることを通じて、自分たちの脳の活性化につながった。
 - 活動を通じて地域の子どもたちに八束の魅力を伝えることができた。また、他業種で働く方ともいろいろと情報交換等ができ、大人同士の新たなつながりが広がった。
 - 子どもと共に学ぶことで、共通の話題ができ、家庭での話題が増えた。
-
- 様々な児童がいる中で、どのように児童に接したらよいか難しさを感じる地域の方もいる。
 - 教職員と地域の方との活動内容等の打合せ時間の確保が難しい。
 - コロナ禍で、活動を発展させて地域に出かけたり、広く地域住民と関わったりすることが難しい状況であった。幅広い地域住民の参画を得て、地域に開かれた活動にしていくためには、来年度導入予定の学校運営協議会を有効に活用し、熟議等を通じて地域と学校の目的等を共有してい

く仕組みを整えていく必要がある。

キ 取組の検証

① 仮説1に対する検証

〈成 果〉

- ・ 地域の特色について、実際に働いている人などから話を聞いたり、実物に触れたりすることは、子どもたちの興味・関心を刺激し、知的好奇心を高めることにつながる。
- ・ 防災ワークショップでの保護者と一緒に行う体験活動やワークショップは、その時の学びや気付きに加え、家庭での振り返り等にもつながり、親子で実生活での防災について積極的に考えられた。

〈課 題〉

- ・ コロナ禍の状況で、活動を発展させて地域に出かけたり、広く地域住民と関わったりすることが難しい状況であった。子どもたちの興味・関心をきっかけとして、地域と学校が連携・協働したプロジェクト学習を展開することで、さらに学びが深まり、子どもたちの意欲や主体性を高めることにつながることを期待できる。
- ・ 「八束の宝を学ぶ」の活動に関わった地域の専門家との調整や打合せは、学校が窓口となり専門家等と直接行っている。より活動を充実させていくためには、事前に地域と学校が目的の共有を行った後、地域側の人材である地域学校協働活動推進員等が中心となって人やものをつなぎコーディネートしていくことが望まれる。

② 仮説2に対する検証

〈成 果〉

- ・ 地域の特色を学ぶ活動を通じて、大人も知らなかった発見や新たな気付きがあった。
- ・ 「八束の宝を学ぶ」や「防災ワークショップ」では、参観日等、保護者も集まる機会を利用し、子どもとともに保護者も学ぶことで、その場での新たな気付きと家庭で子どもと振り返ることでの親子での成長などが期待できる。
- ・ 地域と学校が連携した活動を通じて子どもに関わることで、子どもから活力をもらい元気になるなど、生きがいつくりにつながった。
- ・ 子どもを核とした地域と学校が連携した活動を通じて、大人同士や大人と子どもの新たなつながりづくりのきっかけとなった。

〈課 題〉

- ・ 対象の大人が保護者や地域の専門家に限定されており、幅広い地域の住民の学びにつながるよう、運営体制を更に検討する必要がある。

2 教育課程外

(1)玉野市地域子ども楽級

ア 概要

多くの地域住民の参画による、放課後や休日において、子どもが自主的にアクセスしやすい公民館や学校等の施設を活用し、各種体験教室や交流活動、学習支援を行う「放課後子ども教室事業」。玉野市内の全 14 小学校区で行われている。

地域学校協働活動推進員等が中心となり、休日や放課後に体験活動や交流活動等を行う「子ども楽級」と、学習アドバイザーが中心となり、放課後に学習支援を行う「おさらい会」があり、どちらも各代表を中心に地域住民が運営する。

地域資源を活用しながら、学校や家庭では体験できない、地域に根ざした取組や活動を行っている。

イ 目的

地域ぐるみで豊かな体験活動や交流活動等を行うことにより、「心豊かでたくましい子ども」、「地域に誇りをもつ子ども」を育むとともに、放課後や休日の子どもの居場所づくりに努める。

ウ 主な活動内容

伝統文化	調理	スポーツ	図画工作
交流	科学	放課後学習支援（おさらい会）	

① 活動例

ホットドック作り (調理)	「ひび子ども楽級」 コッペパンにソーセージやチーズ、キャベツを挟み、アルミホイルに包み牛乳パックに入れて焼く方法で、ホットドック作りを行った。
ダンスをしよう♪ (スポーツ、交流)	「ちっこう子ども楽級」 玉野高校ダンス部員を講師としてダンス教室を実施。参加した小学生は汗だくになりながら、笑顔でダンスを楽しんだ。

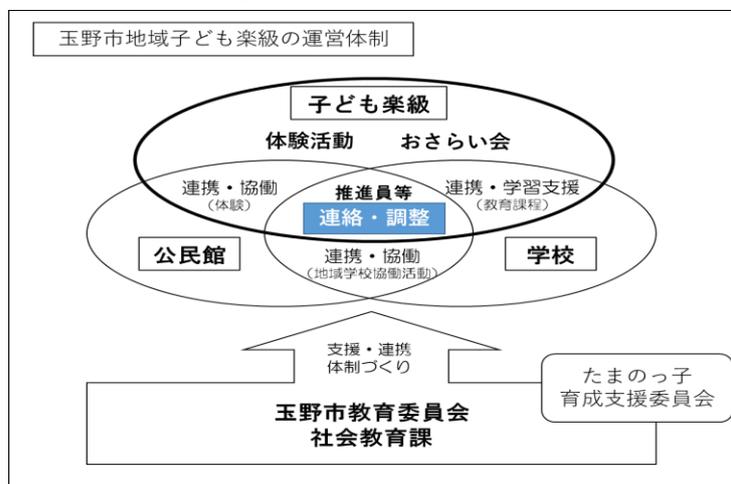
茶道教室 (伝統文化)	「たい子ども楽級」 池田宗政公の茶道流派である「備前御家流」を継承したいという思いから、正式な茶道道具を使い、年間を通じた学習をしている。学習のまとめとして、地域の方を招き、お茶席でお手前を披露した。
----------------	---

② 学校と連携した活動

たい子ども楽級	「学校では夜間に子どもを集めて星を観察することが難しい」という学校からの相談を受けた地域学校協働活動推進員がコーディネートし、4年生理科の学習内容に関連した「星空観察会」を実施した。
ひび子ども楽級	子ども楽級の代表者が学校運営協議会の委員でもあるため、学校の教育活動について会議を通じて共有し、総合的な学習の時間に行った福祉学習の内容と関連させた「障害者スポーツ体験会」(車椅子バスケット)を実施した。
ちっこう子ども楽級 ほか	運動会の開催時期に合わせて、「走り方教室」を実施した。

エ 運営体制

- ① 「地域の子どもは地域で育てる」をテーマに各地域の「子ども楽級」及び「おさらい会」の代表を中心とした地域住民によって運営されている。
- ② 各子ども楽級には事務局として公民館が参画し、地域学校協働活動推進員等のコーディネートのもと、子ども楽級と公民館が協働した活動が行われている。
- ③ 学校の教育課程と連携した活動や地域のイベントと連携した活動、老人会との交流活動、他地域の子ども楽級との交流などが行われている。



オ 活動状況（令和2年度実績より）

教室名	1年間の 開設日数	1回あたりの子どもの参加人数		小学校の 児童数
		平日	休日等	
たい子ども楽級	72日	34人	26人	345人
ちっこう子ども楽級	16日	18人	11人	99人
うの子ども楽級	15日	17人	26人	189人
たま子ども楽級	7日	2人	10人	83人
たまはら子ども楽級	76日	9人	7人	148人
わだ子ども楽級	95日	10人	10人	105人
ひび子ども楽級	55日	11人	12人	108人
しょうない子ども楽級	55日	38人	19人	729人
はちはま子ども楽級	80日	21人	23人	167人
おおさき子ども楽級	19日	5人	22人	96人
やまだ子ども楽級	56日	8人	4人	69人
ごかん子ども楽級	49日	1人	6人	29人
むねあげ子ども楽級	63日	8人	7人	79人
ほこたて子ども楽級	60日	10人	12人	67人

カ 結果（玉野市教育委員会社会教育課担当者への聞き取りより）

- 遊びや物づくり体験、スポーツ、伝統文化、芸術等の活動を通じて、ホンモノを見たり、ホンモノに触れたりし、実感を伴った学びを行うことで、子どもたちの意欲・関心の向上につながっている。地域のものや人、自然との関わりを通じて、地域への愛着形成につながった。
- 時間的な面で教育課程内だけでは実施が難しい発展的学習へとつながることができ、子どもの知的好奇心を満たすことができた。
- 学校教育と社会教育が連携することによって、子どもたちの学びがより実感を伴った深いものになった。
- 活動に関わった大人のアンケート調査からは、「子どもたちに関わることができて楽しい」、「家の周りには子どもがいなくなったので、活動に参加すると賑やかでうれしい」、「計画を立てるのは大変だが、子どもたちの喜ぶ姿を見るとやりがいを感じる」など、やりがいや生きがいづくりにつながっている感想が多く見られた。
- 「活動を続けるうちに、地域の活性化のためにも重要な活動であると感じるようになった」等、子どもたちを核として、「まちづくり」や「ひとづくり」につながっていることを意識している感想も見られた。

- 「たい子ども楽級」で行われた地域づくりに関する講座が、公民館の自主講座として開講されるなど、大人を対象とした講座に発展した事例もあった。
- 「たまはら子ども楽級」のモニュメントづくりでは、子どもと保護者が協力して木材を切り出すことから体験が始まるが、そこでの保護者同士の交流から、新たなつながりが生まれた。
- 地域人材の後継者不足が大きな課題である。特に、コーディネーター等の中心的な活動を行う地域学校協働活動推進員等の立場は後継者にスムーズに引き継ぐことが難しい。現在は、活動を広く地域住民に知ってもらうため、玉野市の広報誌において随時、募集を行ったり、地域ごとに独自のチラシ等を作成したりし、広報活動に努めている。また、玉野市PTA連合会と連携し、保護者世代の地域学校協働活動への参画を呼びかけている。
- 子ども楽級の活動について、地域学校協働活動推進員等を通じた学校との連携は一部の子ども楽級に留まっている。学校の働き方改革が叫ばれる中、学校との関わりを躊躇する地域学校協働活動推進員等もいるが、子どもの実感を伴った豊かな学びを実現するためには、学校と子ども楽級が連携した取組を広め、推進していく必要がある。
- さらに多くの地域住民を巻き込み、豊かな体験活動を充実させていくには、必要な予算を確保する必要がある。

キ 事例の検証

① 仮説1に対する検証

〈成 果〉

- ・ 放課後子ども教室等の地域で放課後や休日に行われている体験活動は、地域の文化や人材を生かした様々な取組が行われている。
- ・ 放課後子ども教室の実施場所は地域の公民館や学校の施設を活用していることが多いことから、多くの子どもが参加しやすい状況にある。
- ・ 学校の教育課程内で実施する活動と、地域等で放課後や休日に行う活動内容をつなげて発展させることで、子どもにとって、より豊かな体験を提供することができる。
- ・ 学校の教育課程と連携した活動や地域のイベントと連携した活動、老人会との交流活動、他地域の子ども楽級との交流など、様々な関係者等と連携することで、多様な活動を展開することができた。

〈課 題〉

- ・ 放課後子ども教室の取組と学校の教育活動との連携は一部に留まっていることから、地域学校協働活動推進員等や放課後子ども教室関係者が熟議等に参加し、活動の一部を学校の取組と連動させていくことが子どもの体験をより豊かにすることに有効である。
- ・ 地域の実情等により、放課後子ども教室等による活動日数や参加する子どもの人数に相違があることから、放課後子ども教室等の取組を広く周知するとともに、多くの子どもが参加しやすい環境を整えていく必要がある。

② 仮説 2 に対する検証

〈成 果〉

- ・ 子どもを育む活動を通じて、大人自身のやりがいや生きがいにつながった。
- ・ 子ども楽級での講座が大人や地域を巻き込んだ活動へと広がり、新たな学びが生まれた。
- ・ 子どもを育む活動をきっかけとして、大人と大人、大人と子ども等の新たなつながりが生まれた。また、そこからグループができ新たな活動が生まれることも期待できる。
- ・ 活動を通じた新たな人間関係の構築や地域での活動への発展等は、地域の活性化にもつながる。

〈課 題〉

- ・ 地域学校協働活動推進員等、活動や人材をコーディネートする人材の後継者が不足していることから、まずは、放課後子ども教室等での活動を広く地域住民に知ってもらい、多くの方が気軽に活動に参加したり、関わったりできる環境づくりが必要である。

第5 子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策について

1 3つの視点から見た方策

(1)視点①

学校と地域(家庭、社会教育施設、社会教育団体、企業等)が連携・協働して行う取組として、就学前から、子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには、どのような取組が有用と考えられるか。

- 子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むためには、豊かな体験活動⁴が必要であり、こうした経験を通じて、子どもは自らの夢を育むことができる。
夢育の推進においては、就学前の子どもたちの保護者を含めた、幅広い世代への豊かな体験活動の働きかけを求める。
なお、体験格差が生じている実態を踏まえ、その是正を図る必要がある。
- 体験格差の是正や学活⁵の視点から、子どもや地域にとって最も身近な存在である学校の間を活用し、教育課程内で全ての子どもが豊かな体験活動を行うことや、体験格差が生まれやすい放課後や休日などの教育課程外で、誰もがアクセスしやすい学校や身近にある公民館等の社会教育施設の間を活用し、豊かな体験活動を提供することが望ましい。
- 地域と学校が連携・協働して行う取組を豊かな体験活動とするためには、地域と学校の関係者間で、子どもたちの実情や課題を整理し、活動目的や活動で育む子ども像、育みたい力等を共有した上で、大人は子どもたちの活動に制限をかけすぎることなく、「伴走者」として適切な支援をすることが求められる。

⁴大人から与えられたものではなく、子どもたちの「やりたい!」「やってみよう!」という内的動機付けにより行われ、かつ、本物に触れたり、「見る」「触る」「味わう」といった直接的な体験、自分たちで計画して実行する活動 (第2より)

⁵最も関わりやすい学校という場を拠点に、保護者が保護者同士・地域の大人・子どもとの関わりを通して学ぶ取組。令和2年6月岡山県生涯学習審議会及び社会教育委員の会議「保護者の学び方改革～みんなで育つ、学活のススメ～(提言)」

その際、大人が育みたい力を見取るためのポイントを共有し、同じ視点で見取り、声掛けを行うことにより、体験の過程に価値づけし、子どもに活動の価値として意識(内面化)しやすいように関わるのが大切である。

見取るためのポイントを明確にするためには、活動における行動指標を地域と学校で作成し、共有することが望ましい。

- 教育課程内で豊かな体験活動を行う取組としては、総合的な学習の時間等で地域と学校が連携・協働し、地域の課題を解決する学習や地域の魅力を発見する学習等が効果的である。

また、放課後や休日に、地域社会全体で豊かな体験活動の場を作っていくことが重要である。

(2)視点②

視点①の取組を行う際、新学習指導要領の基本的な理念である「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、地域住民の参画による学校運営協議会(コミュニティ・スクール)や地域学校協働活動の効果的な推進が求められる中、学校側からの視点も含めて、県内各地域の実情に沿う体制づくり、運営方法は、どのようなものが効果的であるか。

- 地域住民、企業、NPO等多様な主体の参画のもと、子どもの意欲や主体性等自分を高める力を育む潤滑な活動を行う、地域と学校の連携・協働の取組を進めるには、学校のニーズや地域の思いを汲み上げ、地域と学校のつなぎ役となるコーディネーターの存在が不可欠であり、どの学校にも一人は担当するコーディネーターがいることが望ましい。そしてその取組を持続的なものにしていくためには、コーディネーターは法律に位置付けられている地域学校協働活動推進員であることが望ましい。
- 豊かな体験活動を行うためには、幅広い地域住民の参画が必要である。幅広い地域住民の参画を得るには、学校運営協議会(コミュニティ・スクール)や地域学校協働活動を有効に活用し、地域と学校の目的の共有、連携・協働した取組の実施、取組の評価と改善というサイクルを作り、次の取組につなげていくことが必要である。
- 放課後や休日に、地域社会全体で豊かな体験活動の場を作っていくためには、地域住民、企業、NPO等多様な主体を巻き込んだ緩やかなネットワークづくりを進めていくことが求められる。

- 家庭等の状況にかかわらず、全ての子どもに豊かな体験活動を提供していくためには、市町村に対して、必要な予算を確保できるよう働きかけを行うことも重要である。

(3)視点③

子どもたちに豊かな学びを提供する地域ぐるみの活動を、保護者や地域の大人の学びにどのように生かすことができるか。

- 地域と学校が連携・協働することが、地域住民と教職員の信頼関係の構築や地域住民同士の新たなつながりづくりに役立つことが期待できる。
- 地域住民が子どもたちへ豊かな学びを提供することを通して、地域住民による地域づくりへと活動が広がっていくことが期待できる。
- 関係者と活動の目的を共有し、見取りの視点を持って子どもたちの活動に関わったことによる非認知能力の向上につながる子どもの姿を見取る力や大人自身の非認知能力（自制心、意欲、共感性等）そのものの向上により、よりよい人間関係の構築が期待できる。

2 まとめ

- 地域と学校が連携・協働し、子どもや地域にとって最も身近な存在である学校の間を活用し、教育課程内で全ての子どもが豊かな体験活動を行うことや、体験格差が生まれやすい放課後や休日などの教育課程外で、誰もがアクセスしやすい学校や身近にある公民館等の社会教育施設の間を活用し、豊かな体験活動を提供することによって、子どもたちの意欲や主体性等を育むことができる。
- 教育課程内で豊かな体験活動を行う取組としては、総合的な学習の時間等で地域と学校が連携・協働し、地域の課題を解決する学習や地域の魅力を発見する学習等が効果的である。
- その際には、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）や地域学校協働活動の仕組みを利用して、地域学校協働活動推進員等がコーディネーターと

なり、地域と学校の関係者をつなぎ、子どもの実情や課題の整理、活動目的や活動で育みたい力、その力を見取るためのポイント等を共有することが重要である。

- そのようにして、子ども達の育ちに地域の大人が主体的に関わることで、子どもだけでなく、大人にも、非認知能力の向上につながる子どもの姿を見取る力や大人自身の非認知能力（自制心、意欲、共感性等）そのものの向上なども期待される。また、大人同士の新たなつながりが生まれ、地域づくりへと活動が広がっていくことが期待される。

3 具体的な方策の提案

(1)地域と学校をつなぐ人材の育成

- 地域と学校の連携による豊かな体験活動を実施するためには、目指す子ども像等を共有し、その実現に資する分野の人材を活用していくことが考えられるが、更に活動を充実させていくには、地域学校協働活動推進員等のコーディネーターとなる人材の育成が重要である。

ア 地域学校協働活動推進員等の養成

- ・地域と学校の効果的な連携・協働を推進するためには、各学校に、地域学校協働活動推進員等が1名以上在籍することが望ましいため、保護者や地域住民等幅広い立場の人々を対象に、地域学校協働活動推進員等の養成研修会を行い、新たな人材を確保していくことが必要である。

イ 地域学校協働活動推進員等に求められる役割

- ・地域と学校をつなぎ役として実績を持つ5名へのヒアリング（別紙資料編参照）の結果を踏まえ、円滑に地域と学校をつなぐために、地域学校協働活動推進員等には、次の4点が必要である。

- ① 日頃から、学校や地域との関係づくりを行っていること。
- ② 活動で育みたい子ども像等活動の目的について、学校や地域の関係者等と共有していること。
- ③ 活動の目的を達成するための取組を企画立案し、実行すること。
- ④ 活動に関わる人とつながることができるよう円滑な調整を行っていること。

- ・地域学校協働活動推進員等に求められる役割は、社会教育主事に求められること（次の①～⑤）と重なる部分が多く、地域学校協働活動推進員等のスキルアップのためには、社会教育主事講習の受講を促していくことも有効である。

- | | |
|---|----------------|
| ① | 学習課題の把握と企画立案能力 |
| ② | コミュニケーション能力 |
| ③ | 組織化援助の能力 |
| ④ | 調整者としての能力 |
| ⑤ | 幅広い視野と探究心 |

- ・さらに、地域と学校の連携による豊かな体験活動を実施するためには、活動における子どもの言動を大人が適切に評価し、具体的にフィードバックすることが重要であり、そのためには、地域学校協働活動推進員等を対象に、非認知能力に関する理解を促進し、子どもの言動に価値付ける方法を学ぶ機会を設ける必要がある。

ウ 市町村における社会教育主事の配置について

- ・多様な専門性を有する地域の人材や設備を結びつけながら、地域と学校の連携・協働を効果的に進めるためには、各市町村において、学校や地域学校協働活動推進員等へ必要な助言や支援を行う専門的職員である社会教育主事の全市町村での配置が望ましい。社会教育法第九条の二においても都道府県及び市町村の教育委員会事務局に、社会教育主事を置くこととされているが、人事異動等により社会教育主事が不在の市町村も存在している現状があるため、社会教育主事の必要性を働きかけるとともに、社会教育主事のスキルアップにも努めていくことが必要である。

(2)管理職等の豊かな体験活動への理解の促進

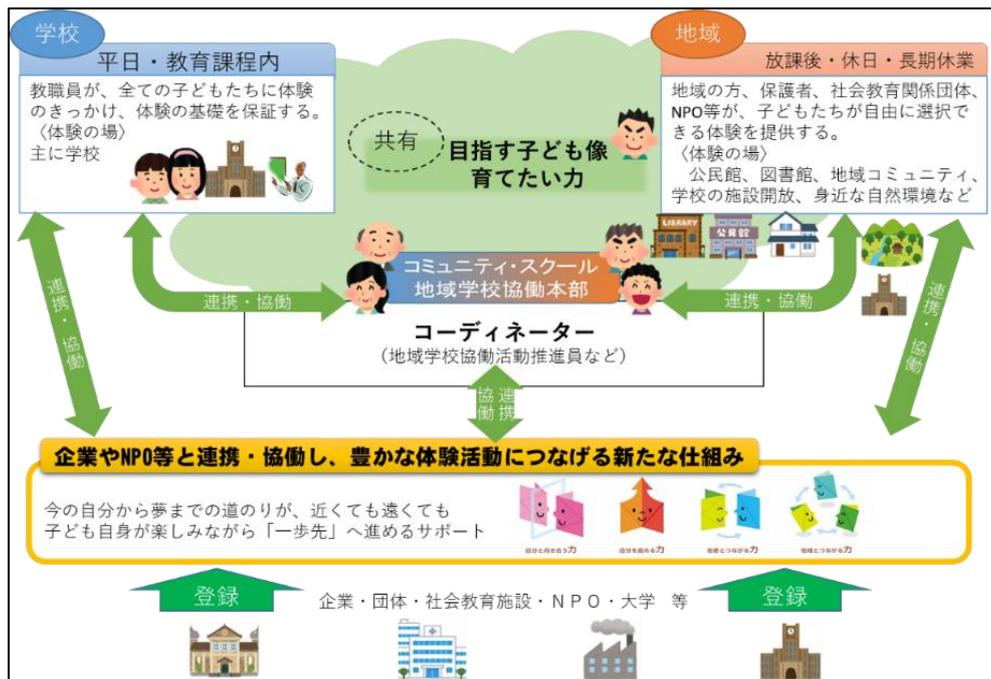
- 地域と学校が連携・協働し、豊かな体験活動を提供していくためには、学校関係者や地域住民等が、地域と学校の連携・協働や豊かな体験活動の必要性について、より一層理解を広げることが重要となる。特に学校長や市町村教育委員会の長等、組織のリーダーの理解が進むよう、働きかけていく必要がある。

(3)子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育むための企業やNPO等と連携・協働した仕組みづくり

- 第4において、子どもたちの意欲や主体性等、自分を高める力を育むための、地域と学校が連携・協働する効果的な体制を検証したが、地域と学校が連携・協働する仕組みや体制が十分に整っていない場合や豊かな体験活動を支援する地域の人材や設備が不足している場合もある。このような場合においては、地域をより広域に捉え、子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育む活動を実施する企業、NPO、社会教育団体等の団体（以下「企業やNPO等」という。）と学校をつなぎ、企業やNPO等が持つ専門的な知識、ノウハウ等を学校の教育活動や休日、放課後等の地域での活動等に取り入れ、豊かな体験活動につなげていくような仕組みづくり（イメージ図参照）が必要である。

この仕組みにより、学校においては、企業やNPO等が持つ専門的な知識、ノウハウ等を教育活動に取り入れ、子どもたちの学びを充実させることができるとともに、学区内の人材や設備だけでは学ぶことのできない領域の活動を行うことが可能になる。また、企業やNPO等においては、活動を通じて、地域への貢献に留まらず、企業理念等を地域や子どもたちへ伝えることや、子どもたちや保護者が企業やNPO等について知り、身近な存在に感じることによって、中長期的な人材確保につながり、学校と企業やNPO等の全てにメリットが期待できる。

図 20 仕組みのイメージ図



県内の企業やNPO等がその活動により育む力の例

「自分を高める力」	意欲・自信・自発性・チャレンジ精神・主体性等
「自分と向き合う力」	自制心・忍耐力・レジリエンス（回復力）等
「他者につながる力」	コミュニケーション力・コラボレーション力 共感性・協調性 等
「地域につながる力」	他者につながる力+郷土愛・当事者性 等

企業やNPO等による子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育む活動事例①

カンコーマナボネクト株式会社

ア 団体の概要

「非認知能力」の育成を軸に、これからの時代に求められる力を育み、環境の変化を乗り越えて、多様な人々と協働しながら、自分らしい人生を切り開いて行けるひとつづくりを目指し活動している企業。全国の幼保・小学校・中学校・高校・大学、行政、企業、地域団体等と協働し、授業や研修等のプログラム開発から評価設計、魅力発信等に取組んでいる。

イ 主な事業（活動）内容

- キャリア教育事業
- 人材育成事業
- 学校魅力化事業
- 働き方改革・業務改善事業

ウ 事業例①：人財育成事業

「非認知能力パートナー養成講座（教員、保育士、地域スポーツ指導者、地域文化活動の指導者、保護者）」

（概要）

子どもと関わる大人が非認知能力について理解し、非認知能力を高めることを意識して子どもと関われるようになることを目的に、非認知能力の伸ばし方を学ぶ研修プログラムを岡山大学の中山准教授と共同開発し、定期的に研修会を開催している。受講者は教員、保育士、地域スポーツ指導者、地域文化活動の指導者など多岐に渡り、令和3年度には、岡山県生涯学習課から事業委託を受け、未就学児を持つ保護者向けの研修プログラムを開発した。

事業例②：キャリア教育事業

「AnCsプログラム（小学校高学年～高校生）」

（概要）

地域の大人が、これまでの人生の浮き沈みをグラフで示しながら職業

観や人生観、夢や目標を紹介。子どもたちは講話を通じて、自分の強みや弱みを考え、仲間と認め合いながら、10年後の自分の姿を描くプログラム。今の自分を認め、生き方を考えることで、教育活動に対する動機づけにもつながっている。これまで延べ2,000名以上の児童生徒が参加しており、教員やゲストとの振り返りや研修なども行っている。

企業やNPO等による子どもたちの意欲や主体性等自分を高める力を育む活動事例②

NPO法人備前プレーパークの会

ア 団体の概要

備前市内の自然豊かな里山環境を最大限に活かすプレーパークである。「森の冒険ひみつ基地」を拠点とし、子どもの遊ぶ環境の充実や子育て支援、多世代交流等の事業を行っている。

イ 主な事業

- 備前市地域子育て支援拠点事業
- プレーパーク事業
- 備前市利用者支援事業
- 森のようちえん事業
 - 0～2歳児対象の小規模保育園の運営
 - 3～5歳児対象の認可外保育施設の運営

ウ 事業例：プレーパーク事業「森の冒険ひみつ基地」

(概要)

既設の固定遊具はなく、火や水、土、木、落ち葉などの自然環境、廃材や身近な道具などから、自らひらめき、発見し、自由に遊びを創造できる遊び場である。

自由な遊びを通じて人と関わり合い、創意工夫し、挑戦・失敗し、それら乗り越えていく中で、子どもたちの自己肯定感や非認知能力等、目には見えない「心の根っこ」を育む。

遊びの例

- ・子どもの主体的な興味、関心をベースにした自由な遊び
 - 落ち葉集め、昆虫採集、トカゲとり、自由工作（紙・自然物・粘土・木工）、昔遊び、たき火、どろんこ遊び、水遊び、ダムづくり、ままごと、鬼ごっこ、探検ごっこ、べっこうあめづくり、まきまきパンづくり、やきいも、ひみつ基地づくり、名のないあそび 等

おわりに

今後この答申の内容を実現するためには、県教育委員会だけではなく、市町村教育委員会や首長担当部局との連携が求められる。学校、地域、家庭、企業、NPO、社会教育関係団体等の任意団体など社会の全ての構成員がこれからの社会を担う「子どもたちの夢を育む生涯学習の推進方策」について、具体的に行動していくことを期待したい。

県教育委員会には、この答申が県民に広く理解される機会を設けるよう尽力することを望む。